

美術鑑賞教育活動における子どもたちのコミュニケーション 参与観察法と聞き取り調査法を通して

染谷 知美

これまで私は、美術館と聞くと大人の娯楽というイメージが強く、美術館は美術に興味のある限られた人たちしか来館しないのではないかと感じていた。しかし、最近では子ども向けの取り組みが行われるようになり、子どもたちは美術館で行われる活動を通して、何を感じているのかについて疑問に思った。本研究では、美術館が子ども向けに行っている美術鑑賞教育活動に注目し、子どもたちのコミュニケーションに焦点をあて、どんな活動が行われ、子どもたちが何を感じているのかなど、美術鑑賞教育活動が持っている力を明らかにする。

鑑賞活動の実際を対象とするため、活動を行っている美術館三館に依頼し、9回にわたる参与観察を行った。その中には、実際に調査者が活動を行う仲介者となり、活動を体験しながら観察を行ったものもある。観察は、子どもたちの言語的なコミュニケーションに注目するとともに、子どもたちの感情を如実に表す非言語要素にも注目し、観察を行った。また、子どもや仲介者、活動を取りしきる運営者に聞き取り調査を行うことで、鑑賞活動を多角的に観察し、子どもたちや仲介者のコミュニケーションの様子を探った。

得られたデータから、「全体を通して言えること」と「コミュニケーションを中心とした分析」の二つの観点から分析を行うこととし、鑑賞活動の実像をとらえることとした。これらの観点から分析を行うため、記述した客観的事実に色分けをし、結果を検討した。

鑑賞活動の中で子どもたちは、美術作品、子どもたち同士、仲介者とコミュニケーションをとっていた。そして、それらのコミュニケーションが複雑に関係しあう中で、子どもたちは美術作品に関する知識や自分の感性に裏打ちされた新たな気づきを得ていることが明らかになった。また、子どもたちが他人と関わり合うことで、批判的な見方や自ら考える力、コミュニケーション能力を成長させている様子が観察できた。加えて、鑑賞活動には一連の流れやパターンが存在していることがわかった。そして、鑑賞活動に必要な仲介者の役割や、子どもたちの年齢によって鑑賞活動に差異が生じていることを見出した。

本研究では、子どもたちが美術鑑賞教育活動に参加することで、子どもの内に様々な成長を促していることが観察できた。また鑑賞活動の実際を具体的に描くことができ、活動にかかわる仲介者がどのような役割をもち、どのように活動を行っているのか示すことができた。これらの美術鑑賞教育活動におけるコミュニケーションを通して、子どもたちが豊かな人間性を養っていると考えられるだろう。最後に美術鑑賞教育活動が、より発展するための方法を私なりに考え、「これからの美術鑑賞教育活動」と題して、まとめて提案した。

(指導教員 武者小路澄子)